

女性用風俗の内勤やってたら

憧れセラピストによる講習会の実演に巻き込まれた話

桜餅りんり

楓さんがわたしのところに、「ちょっと身体貸してくれない？」と言いに来たのは、夜七時過ぎのことだった。

わたしが内勤として勤めている女性用風俗店は、夜九時営業開始だ。内勤は準備時間が一番忙しいとは言え、今日は出勤も予約も少ない日なので今日はあまり忙しくない。何より、この仕事はセラピスト命。この店のトップセラピストである楓さんのそのお願いを断れるはずなどなかった。

が。身体を貸す、というありふれた文言にわたしは少しだけ警戒心を覚えた。目の前でにこにこ微笑んでいるベビーフェイスの楓さんをじっと見る。かわいい顔をして、中身は数々の女性たちを虜にしている狼だ。別名色恋営業の悪魔。

「また、楓さんの練習台、とか……？」

一度楓さんの『練習台』にされて恋情を拗らせて仕事をやめざるを得なくなった同僚を見ているのだ。そういう役目ならごめんだ。わたしはまだ失職したくない。

楓さんはちよつと苦笑して、軽く両手を上げてみせた。

「いや、今日は本当に業務。先週、新しいセラピストの子が入ってきたでしょ」

「ああ、そうでしたね」

この業界は入れ代わり立ち代わりが激しいので、新人はどんどん入ってくる。

「それでね。その子たちに、女の子にはこう接しましょうねって講習会を、俺がやらないといけなくて。女の子役をやって欲しいんだ」

「なるほど」

思っていたよりちゃんと業務だった。新人へのレクチャーは先輩セラピストや内勤の仕事なので、わたしがそこに協力することは問題がない。ないけれど。

思わず、楓さんから小さく目を逸らした。くりくりと大きな瞳で見つめてくるベビーフェイス。優しい喋り方に、甘やかすのがうまい声。そして男らしさを備えた、骨ばった大きなてのひら。正直言って、楓さんはかなりカッコいい。

女の子への接し方の講習ということは、色恋営業の悪魔の色恋営業文句を囁かれたり、あとは抱きしめられたりということくらいはあるのかもしれない。それで自分が同僚のように恋情を拗らせないでいられるだろうか。正直いって、あまり自信がない。

そう思って返答にまごついていると、楓さんがぐっと顔を覗き込んで来た。

「不安？」

「え、あつ、いや」

不安は不安だが、あなたに恋情を拗らせないかの心配で——なんて言えるはずもないわたしの肩を、楓さんがぽんと叩いた。

「今日はざっくり俺が教えるだけだから、新人の子たちには指一本触れられないようにするよ。俺がするだけ」

不安に思っていたのはそこではないのだけれど、ここまで細やかに氣を使ってくれている楓さんにこれ以上不安を覚えるのも申し訳ない氣がしてきました。楓さんだってプロだし、同僚の件は申し訳ないと思ってるって飲み会で言っていた氣がするし。多分。

「いいですよ」

そう答えると、楓さんはふわっと嬉しそうに笑って、わたしにバスタオルを渡してきた。

「ありがと。じゃあ、シャワーを浴びたら講習室でね」

楓さんがひらひらとてのひらを振って去っていく。わたしはバスタオルを持ったまま、シャワー、という言葉を一週遅れで噛み締めた。……あれ、シャワーを浴びる必要があるの？

バスタオルの下にはちゃっかりとバスローブもあった。ひとまず言われた通りにシャワー室でシャワーを浴びながら、まあでも楓さんだってハグするならシャワー浴びたての女の方がいいもんな、汗だくの女に実演するのも楓さんだって大変だろうし、と無理に自分を納得させる。バスローブの間にはお客さんが使う用の紙ショーツまであったけれど、まあマッサージオイルを使うなら汚れない方がいいと思って大人しく紙ショーツを履いた。……そういう理由だよね？

髪の毛をざっくりまとめ、講習室に向かう。中にはきつちりと正座をした見慣れない顔の男の子が三人。楓さんは出勤用の白シャツにスラックスへと着替えていた。

楓さんの顔をおそろおそろ見ると、彼はふっと笑いかけてきた。

「緊張している？」

「え、う……少し」

楓さんは立ち上がったて、躊躇いなくわたしの肩を抱いた。ムスクの香りが、ふんわりとたちのぼる。

「大丈夫、怖くないよ」

ゆっくりと布団の上へと誘われれば、まるで気分はお姫様で。たまにはこんな気分を味わうのも悪くないかもしれない———と思いついてはじめていただけ、布団の上に座った瞬間、わたしは硬直した。そこに並べられている、数々の大人のおもちゃを見てしまったから。

「待っ——！」

「だいじょうぶ」

楓さんはちよつとだけ意地悪そうにくすくす笑うと、くるっとわたしの

手首を背中側に回してきた。かしゃん、という音と共に手首にひんやりとした金属があたり、プレイ用の手錠をかけられたことを知る。そのままぎゅっと楓さんに後ろから抱きしめられれば、もう身動きを取ることはできない。

「たまには、いっぱい気持ちよくなろうね。——ちゃん」

ぞくり、震えた身体を楓さんが撫でる。そっと首筋に口づけられただけで身体がぐっと熱くなる。ぎゅっと唇を噛み締めれば、こちらをぽかんとした顔で見つめている新人の男の子と目が合った。なんで見てるのよ。いや、講習会なんだから当たり前だけど。

優しくもはつきりした声で、女の子にはたくさん期待をさせること、と



楓さんは言う。女の子は想像力が豊だから、あんな目に遭うのかな、こんな目に遭うのかなって期待しているだけで気持ちよくなってくるから、と。わたしは思わず並べられたおもちゃたちを睨みつけた。もしかして、わざとああやって置かれているのか。

すると楓さんがそっとわたしの髪の毛を耳にかきあげて、小さく首を傾げた。

「期待した？」

「……っ、」

「ちよつと、説明しよっか」

楓さんがそこに並べられているパステルカラーのものを一つ手に取った。スイッチのついた、小さな卵型のもの。これは、何となく分かってしまふ。

「これは、こうやってぶるぶるって」

小さく振動したそれを肩に押し付けられて、身体がびくりと震えてしまった。楓さんはそんなわたしを見て声を出して笑ったあとに、わたしの頭を優しく撫でつけてきた。そのあと、新人の男の子たちの方を向いて言う。

「よく強い振動を押し付けられいいって思う人もいるみたいだけど、それは絶対に違うからね。まずは時間をかけることと、あとはその子にとって気持ちがいい場所をじっくり探ること。具体的には」

楓さんが、何かを表すかのように左手の指を二本そろえて、その表面を右手の指で撫でる。

「表側、裏側、右側と左側、あと先っぽとあって、女の子によって気持ちがいい場所は違う。だからまずは弱い振動を一個ずつあてて、一番反応が

あった場所にちよつとずつ強い振動を当てて行く」

「っ、う……」

これからされることを丁寧に説明されると、股の間がむずむずした。思わずもぞりと身体を動かせば、楓さんは宥めるみたいにぽんぽんと叩いてきた。

「ちよつと、ごめんね」

ふわりとバスローブをめくられれば、紙ショーツが露わになる。恥ずかしくてすり寄せた膝を、「よいしょつと」と意外にも強い力で割り開かれれば、紙ショーツに包まれたまたぐらがぐつと押し出されてしまう。

「言い忘れてたけど、いきなり直接もNGね。まずはこうやって」

「んっ」

「下着の上から、やんわり押し当ててあげて」

「あ、う」

ぶるぶると震えるそれが、そつとその場所に押し付けられる。ぶるぶるぶる、と微弱な振動はもどかしいけれど気持ちがよくって、思わず首を振った。楓さんは優しく微笑んで、首を傾げる。

「これ使うの、初めて？」

「は、い」

「そっか。じゃあゆっくりしようね」

楓さんはそう言っただけでわたしのほつぺたに口づけを落とすと、とんとんと陰核の上をタップしてきた。長い指に与えられる振動に、股がぞわぞわした。

「恥ずかしいけど、講習だからごめんね。脱いじゃおうか」

楓さんはわたしのお尻を撫でたあと、するりと紙ショーツを脱がしてき

た。ああやっぱり脱がないといけなひのかと思つて羞恥心を噛み締めてい  
ると、新人の男の子たちのちよつとぎらぎらした目線を向けられて、怖く  
なった。思わず楓さんの腕をぎゅつと掴めば、楓さんは、うん、と甘やか  
すような相槌を打ってくれる。

「俺しか触らないからね。大丈夫」

「う、うう」

その言葉に溶けるような安堵を覚えてしまふ自分が恥ずかしいし悔し  
い。これが色恋営業の悪魔かなどと思つていると、楓さんの指がローター  
を陰唇のあたりに押し付けてくる。

「あ、あ」

ぶるぶるとした振動はさっきよりも直接的で、思わず足が暴れそうにな  
った。けれど楓さんの長い脚にぎゅつと絡めとられれば、足を動かすこと

はできなくなってしまう。

「ちよつと大きくなってきたかな？」

楓さんは陰唇ごしにそれにこりつと触れてくる。

「このあと剥いて、直接しよつか」

「うう……やだあ」

「初めてだと、ちよつと怖いかな？ でも気持ちがいいからねー」

ほら、とその器用な指先が陰唇を開いて、陰核を露出させてくる。空気に触れた瞬間ひんやりとしただけで気持ちがよくて、わたしは小さく声を漏らした。

「ぶるぶる、するね」

「や、待っ……や」

「ちよつと当てるだけだから、怖くないよ」

「あ……あっ……!」

むき出しにされたそれに、ぶるぶる、とそれが押し付けられる。びくと震えた身体はたやすく抑え込まれ、表面を探るようになってくるとそれで撫でられる。やだあ、やつ、とあがくわたしの耳元で、楓さんはのんびりとした声を出す。

「気持ちがいい場所探そっか」

わたしは楓さんの言葉を思い出して、はっとした。気持ちがいい場所をじっくり探してその場所を——なんて、絶対に、だめだ。死んでしまう。

楓さんはくるくると陰核のあちこちにそれを当てて、気持ちがいい場所を探してくる。わたしはぐっと唇を食いしばった。その場所が、絶対にばれてしまわないように。

それなのに。

「うん」

楓さんはローターを外すと、ぽんぽんとわたしの頭を撫でて、新人の子の方に目を向けた。

「どこがこの子の一番気持ちがいい場所か、分かる？」

「えっ、と」

男の子は少し考えたあとに、右の辺りですか、と答えた。そうだできればそう思っ<sup>て</sup>ほしいと演技をしたのだけれど――楓さんはあつさりと、はずれ、と言<sup>っ</sup>てのけた。

「本当はこの、」

「んあっ」

「先っぽのところ、かな」

ちよん、と指先で触れられて、わたしは血の気が引く思いだった。なん



で、なんでばれてるの。

「気持ちがいい場所がばれるのが怖くて、声抑えちゃったんだよね。反応でだいたい分かった」

「や……やだ、」

「素直じゃなくてかわいいね」

楓さんはぶるぶる震えるそれを手に取って、ゆっくりと近づけてくる。

お願いやだやめて、と口にしようとした言葉は、間に合わなかった。

「あああっ」

「ほら、ぶるぶるー」

一番気持ちがいい場所にピンポイントで押し当てられて、わたしは濁った嬌声をあげた。ヤダやだ気持ちいいのとあがくわたしに構わず、楓さんは、ちよっと強くするねとあっさり言っただけ。